

## 主食パターン分布構造の変動

—最近10年間の構造的変化—

内野澄子・三田房美

### はじめに：主食パターンと米飯

日本人の食生活は、戦後において量、質ともに画期的な変化を遂げてきた。それは食事献立の王座を占めていた米飯が副食の地位への転落であるともいえよう。栄養素をバランスよく摂取するためには、当然の望ましい変化である。しかし、そのことは必ずしも食生活における「米離れ」とはいえない。日本人の食生活における米はその頻度は低下しても、伝統的な米に対する味覚は、日本人の食生活に不可分な要素として残存し続けると考えられる。またそのことはバランスのとれた食生活の観点からも望ましい。しかし、問題点は、日本人の食生活の中における米飯の位置の変化である。

ここでは、米飯が1日3回の食事の中に占める位置、さらに米飯以外の主食パターンとの関連で、どのように変化してきたかを最近の10年間について考察することを目的としている。国民全体についてのマクロ的分析と共に男女、年齢、教育程度、職業、地域、世帯規模、移動経験の有無による差異をもあきらかにしたい。このことはまた将来の変化の予測的研究のための重要な基礎資料となるであろう。

### 1. 分析の基礎資料

厚生省人口問題研究所においては、昭和51年度実地調査「地域人口移動に関する調査<sup>1)</sup>」、また昭和60年においても同じく全国的なサンプル調査「家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査<sup>2)</sup>」の一環として、主食パターン調査が含まれていた。前者の調査対象数は7,952世帯、有効票率96.7%、後者の調査対象数は8,933世帯、有効票率86.3%である。第1次石油ショックが起きたのが昭和48年(1973年)であり、第2次石油ショックが53年(1978年)であるが、本調査はそれ以降の経済停滞期の約10年間を含んでいるため重要な意義をもっていると思われる。

### 2. 主食パターンの全国的分布構造

主食パターンについては、朝・昼・夕の3回の食事における主食の種類によって次の6つのパターンに区分した。(1)3食とも米飯、(2)朝米飯・昼めん・夕米飯、(3)朝米飯・昼パン・夕米飯、(4)朝パン・昼米飯・夕米飯、(5)朝欠食・昼米飯・夕米飯、(6)その他。

主食パターン別分布を昭和51年と60年の調査結果について示したものが表1である。ここでは総数

1) 厚生省人口問題研究所、『昭和51年度実地調査、地域人口移動に関する調査報告—概報および主要結果表』、実地調査報告資料、1977年5月、p.143。

2) 厚生省人口問題研究所、『昭和60年度実地調査、家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査』、実地調査報告資料、1985年6月、p.261。

表1 主食パターン分布

| 主食パターン     | 総計    |       |       |       | 男     |       |       |       | 女     |       |       |       |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|            | 昭和51年 |       | 昭和60年 |       | 昭和51年 |       | 昭和60年 |       | 昭和51年 |       | 昭和60年 |       |
|            | 実数    | 割合    | 実数    | 割合    | 実数    | 割合    | 実数    | 割合    | 実数    | 割合    | 実数    | 割合    |
| 朝・昼・夕      | (%)   |       | (%)   |       | (%)   |       | (%)   |       | (%)   |       | (%)   |       |
| 1 米飯+米飯+米飯 | 4,788 | 62.3  | 4,221 | 54.8  | 4,198 | 64.2  | 3,787 | 56.6  | 590   | 51.4  | 434   | 42.6  |
| 2 米飯+めん+米飯 | 422   | 5.5   | 509   | 6.6   | 367   | 5.6   | 459   | 6.9   | 55    | 4.8   | 50    | 4.9   |
| 3 米飯+パン+米飯 | 300   | 3.9   | 265   | 3.4   | 220   | 3.4   | 206   | 3.1   | 80    | 7.0   | 59    | 5.8   |
| 4 パン+米飯+米飯 | 1,285 | 16.7  | 1,666 | 21.6  | 1,074 | 16.4  | 1,372 | 20.5  | 211   | 18.4  | 294   | 28.9  |
| 5 欠食+米飯+米飯 | 435   | 5.7   | 449   | 5.8   | 358   | 5.5   | 373   | 5.6   | 77    | 6.7   | 76    | 7.5   |
| 6 その他      | 436   | 5.6   | 587   | 7.6   | 303   | 4.6   | 484   | 7.3   | 133   | 11.6  | 103   | 10.1  |
| 7 不詳       | 25    | 0.3   | 11    | 0.1   | 24    | 0.4   | 9     | 0.1   | 1     | 0.1   | 2     | 0.2   |
| 総計         | 7,691 | 100.0 | 7,708 | 100.0 | 6,544 | 100.0 | 6,690 | 100.0 | 1,147 | 100.0 | 1,018 | 100.0 |

と男女別の集計結果が示されている。総数についてみるともっとも注目すべき変化は、3食米飯パターンをとるものの割合が昭和51年の62.3%からさらに低下し54.8%を示していることである。つまり3食米飯をとるものが半分近くにまで減少したことになる。次いで朝パン食パターンの変化であって、このパターンをとるものの割合は、昭和51年の16.7%が60年には21.6%へと増加していることが注目されよう。これ以外の主食パターンの変化は小さい。昼パンパターンの減少傾向に対して、昼めんパターンの増大、「その他」のパターンの増大がみられる。特に「その他」のパターンが昭和51年の5.6%から60年には7.6%とかなり著しい増加を示しているが、これは、ここでの主食パターン区分のいずれにも該当しない主食パターンが増加してきていることを示唆している。3食米飯という伝統的パターンが全体の半分余にまで減少してきたことと共に夕食米飯をとるものは、ここでのすべてのパターンに含まれていることに留意すべきである。

次に、この主食パターンの分布構造を男女別に区分してみると表1から明らかなように総数の変化は、女の変化に強く影響されていることが理解される。3食米飯パターンを男についてみると、この期間に64.2%から56.6%へと低下しているのに対し、女では51.4%から42.6%と低下している。男では11.8%の低下率であるのに対し、女では17.1%の低下率である。女では逐に50%水準を割って43%へと低減していることが注目されよう。

次いで著しい変化は、朝パン食パターンであるが、男についてみるとこの期間に16.4%から20.5%へと増加しているのに対して、女は18.4%から28.9%と増大している。男の増加率25%に対して、女のそれは57.1%と著しく高い。これ以外の主食パターンを男についてみると、昼めんパターンの増大と「その他」パターンの増大傾向がみとめられる。女についてみると昼パンパターンの減少と朝欠食パターンの若干の増大傾向がみられる。

いずれにしても、女の主食パターン分布では3食米飯パターンの著しい減少と、朝パンパターンの増大傾向が著しく、主食パターンの多様化は男に比較してはるかに進行していることが理解される。

### 3. 年齢からみた主食パターン分布構造

次に、主食パターンの分布構造を年齢別に考察してみよう。表2は年齢別に主食パターンの分布構造を昭和51年と昭和60年について比較したものである。

3食米飯パターンの割合は、年齢の増大にともなって増加する傾向が一般にみられてきた。このことは昭和51年調査の結果によく反映している。しかし、昭和60年には50～54歳までは、その割合が51

表2 年齢別にみた主食パターン分布

(単位：%)

| 年次    | 総計            |               | 主食パターン |       |       |       |       |       |       |       |        |        |       |       |
|-------|---------------|---------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|
|       |               |               | 111    |       | 131   |       | 141   |       | 411   |       | 011    |        | その他   |       |
|       | 昭51           | 昭60           | 昭51    | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51    | 昭60    | 昭51   | 昭60   |
| 25歳未満 | 100.0 (506)   | 100.0 (385)   | 40.5   | 22.3  | 1.6   | 2.1   | 4.2   | 0.5   | 21.1  | 40.0  | 21.3   | 25.5   | 11.1  | 9.6   |
| 25～29 | 100.0 (749)   | 100.0 (405)   | 46.9   | 30.9  | 4.4   | 3.6   | 3.1   | 2.0   | 23.2  | 30.1  | 14.7   | 19.5   | 7.4   | 13.8  |
| 30～34 | 100.0 (799)   | 100.0 (615)   | 56.1   | 44.4  | 5.6   | 7.2   | 2.4   | 2.3   | 24.0  | 28.3  | 5.9    | 8.8    | 5.8   | 9.1   |
| 35～39 | 100.0 (876)   | 100.0 (890)   | 57.4   | 49.6  | 6.1   | 5.4   | 3.0   | 3.0   | 20.3  | 27.2  | 5.8    | 7.4    | 6.7   | 7.6   |
| 40～44 | 100.0 (941)   | 100.0 (952)   | 66.1   | 50.8  | 6.4   | 8.1   | 4.0   | 2.9   | 14.8  | 25.3  | 3.3    | 5.1    | 5.3   | 7.8   |
| 45～49 | 100.0 (1,031) | 100.0 (945)   | 66.1   | 62.4  | 6.2   | 7.0   | 3.8   | 2.1   | 15.8  | 18.8  | 3.0    | 3.6    | 4.5   | 6.3   |
| 50～54 | 100.0 (788)   | 100.0 (992)   | 67.0   | 67.8  | 7.1   | 7.0   | 4.2   | 3.2   | 13.2  | 14.0  | 2.5    | 3.2    | 5.7   | 4.9   |
| 55～59 | 100.0 (568)   | 100.0 (834)   | 68.3   | 62.1  | 6.3   | 7.3   | 5.3   | 3.1   | 13.2  | 18.0  | 2.3    | 2.3    | 4.2   | 7.2   |
| 60～64 | 100.0 (536)   | 100.0 (558)   | 75.0   | 63.4  | 6.2   | 9.5   | 3.9   | 5.6   | 10.3  | 15.8  | 1.7    | 1.1    | 2.8   | 5.1   |
| 65歳以上 | 100.0 (896)   | 100.0 (1,132) | 73.4   | 59.8  | 3.8   | 7.6   | 5.6   | 6.8   | 10.9  | 15.7  | 1.7    | 1.1    | 4.4   | 8.8   |
| 総計    | 100.0 (7,691) | 100.0 (7,708) | 62.3   | 54.8  | 5.5   | 6.6   | 3.9   | 3.4   | 16.7  | 21.6  | 5.7    | 5.8    | 5.6   | 7.6   |
|       | 平均値 (%)       |               | 61.68  | 51.35 | 5.37  | 6.48  | 3.95  | 3.15  | 16.68 | 23.32 | 6.22   | 7.78   | 5.79  | 8.02  |
|       | 標準偏差 (%)      |               | 11.27  | 15.05 | 1.65  | 2.20  | 0.98  | 1.81  | 5.07  | 8.29  | 6.57   | 8.28   | 2.28  | 2.58  |
|       | 変化係数 (%)      |               | 18.27  | 29.31 | 30.73 | 33.88 | 24.93 | 57.56 | 30.40 | 35.54 | 105.64 | 106.74 | 39.44 | 32.14 |

備考) ( ) 内数値は実数である。

不詳は除く。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米 + 米 + 米 131 = 米 + めん + 米 141 = 米 + パン + 米 411 = パン + 米 + 米 011 = 欠 + 米 + 米  
上記のパターン以外はその他とした。

年に比較して著しく低下しながらも年齢の増大と共に増加する傾向がみられる。しかし、50～54歳以上の年齢においては51年とは反対に低下する傾向がみられる。特に60～64歳、65歳以上についてみると51年調査よりもそれぞれ11.6ポイント、13.6ポイントも低下していることは注目される点である。さらに変化係数でも昭和51年よりも60年において年齢間の格差が拡大している。いずれにしても50～54歳の年齢での3食米飯率が転換期にあることを示唆しているように思われる。

次に重要なパターンである朝パン食パターンについてみると、各年齢とも(50～54歳以外)すべて51年調査よりも増加傾向にある。昭和51年においては30～34歳が最高の割合を示していたが、61年にはもっとも若い25歳未満が最高率を示し、そのあと年齢の増大と共に減少し、50～54歳で最低率に達したあと若干増加している。ここで興味深い点は、50～54歳の朝パン食パターンの割合がこの10年間にほとんど変化していないことであって、3食米飯パターンのばあいと同様であることが指摘される。50～54歳という年齢層での3食米飯パターン率、朝パン食パターン率がこの期間に変化していないことは、50～54歳という年齢自体に特徴的なものがあるのかどうか検討を要する課題である。

朝欠食パターンの割合は25歳未満、25～29歳の若い年齢層において一般に高いが、51年調査に比較して60年には増加していることが注目される。25歳未満ではこの期間に21.3%から25.5%に、25～29歳では14.7%から19.5%と著しい増加を示している。このパターンが特に若年層に高いということとこの傾向が10年前よりもさらに増大していることは注目すべきであろう。

年齢によって主食パターンの分布構造に著しい差異があること、かつこの10年間にもっとも主要な比重を占めている3食米飯パターンと朝パン食パターンの年齢別格差がさらに拡大したこと、しかし、50～54歳層においてはほとんど変化がなかったことに留意すべきであろう。

#### 4. 地域別にみた主食パターン分布構造

次に居住地域別に主食パターンの分布構造の特徴とその10年間における変化について考察してみよう。

表3 居住地域別主食パターン

| (1) 昭和51年 (単位:%) |              |        |         |       |       |       | (2) 昭和60年 (単位:%) |              |        |         |       |       |       |
|------------------|--------------|--------|---------|-------|-------|-------|------------------|--------------|--------|---------|-------|-------|-------|
| 地域               | 総計           | 主食パターン |         |       |       |       | 地域               | 総計           | 主食パターン |         |       |       |       |
|                  |              | 111    | 131+141 | 411   | 011   | その他   |                  |              | 111    | 131+141 | 411   | 011   | その他   |
| 総数               | 100.0(7,567) | 62.3   | 9.5     | 16.7  | 5.6   | 5.9   | 総数               | 100.0(7,708) | 54.8   | 10.0    | 21.6  | 5.8   | 7.6   |
| 北海道              | 100.0(248)   | 73.8   | 12.5    | 6.9   | 4.8   | 2.0   | 北海道              | 100.0(547)   | 54.3   | 19.7    | 12.1  | 6.8   | 7.1   |
| 北東北              | 100.0(395)   | 77.2   | 9.1     | 4.3   | 5.6   | 3.8   | 北東北              | 100.0(422)   | 70.9   | 16.3    | 5.2   | 3.6   | 4.0   |
| 南東北              | 100.0(176)   | 79.5   | 9.1     | 5.7   | 2.8   | 2.8   | 南東北              | 100.0(129)   | 63.9   | 18.7    | 8.5   | 3.1   | 6.2   |
| 北関東              | 100.0(639)   | 63.7   | 15.3    | 8.5   | 7.2   | 5.3   | 北関東              | 100.0(295)   | 65.8   | 13.3    | 10.5  | 1.0   | 9.5   |
| 北陸               | 100.0(382)   | 79.6   | 6.8     | 6.8   | 4.5   | 2.4   | 北陸               | 100.0(280)   | 73.9   | 4.3     | 14.3  | 3.9   | 3.2   |
| 東山               | 100.0(289)   | 75.4   | 10.4    | 4.5   | 6.6   | 3.1   | 東山               | 100.0(327)   | 71.3   | 7.7     | 10.1  | 4.3   | 6.7   |
| 京阪周辺             | 100.0(214)   | 71.5   | 5.1     | 19.2  | 1.4   | 2.8   | 京阪周辺             | 100.0(387)   | 46.3   | 2.9     | 39.8  | 8.0   | 3.1   |
| 山陰               | 100.0(161)   | 81.4   | 3.7     | 10.6  | 2.5   | 1.9   | 山陰               | 100.0(53)    | 83.0   | 1.9     | 13.2  | 1.9   | -     |
| 山陽               | 100.0(369)   | 65.0   | 5.4     | 21.1  | 5.7   | 2.7   | 山陽               | 100.0(432)   | 60.4   | 5.1     | 23.8  | 4.4   | 6.1   |
| 四国               | 100.0(297)   | 68.0   | 5.4     | 20.9  | 2.0   | 3.7   | 四国               | 100.0(143)   | 67.1   | 6.3     | 17.5  | 7.0   | 2.1   |
| 北九州              | 100.0(409)   | 75.3   | 7.8     | 7.6   | 5.4   | 3.9   | 北九州              | 100.0(536)   | 64.7   | 7.5     | 18.5  | 5.6   | 3.8   |
| 南九州              | 100.0(481)   | 81.7   | 5.4     | 7.1   | 3.5   | 2.3   | 南九州              | 100.0(403)   | 73.9   | 7.2     | 11.9  | 6.0   | 1.0   |
| 沖縄               | -            | -      | -       | -     | -     | -     | 沖縄               | 100.0(69)    | 65.2   | -       | 31.9  | -     | 2.9   |
| 小計               | 100.0(4,060) | 73.5   | 8.3     | 10.3  | 4.6   | 3.3   | 小計               | 100.0(4,023) | 64.2   | 9.7     | 16.4  | 5.0   | 4.7   |
| 東京圏              | 100.0(1,986) | 41.2   | 14.4    | 23.9  | 7.3   | 13.2  | 東京圏              | 100.0(1,785) | 38.0   | 14.8    | 23.5  | 7.8   | 15.5  |
| 阪神圏              | 100.0(882)   | 53.1   | 5.3     | 31.2  | 6.3   | 4.1   | 阪神圏              | 100.0(976)   | 43.8   | 5.8     | 37.9  | 5.9   | 6.6   |
| 中京圏              | 100.0(639)   | 69.0   | 7.5     | 15.6  | 5.2   | 2.7   | 中京圏              | 100.0(924)   | 57.8   | 6.9     | 23.4  | 5.7   | 6.1   |
| 小計               | 100.0(3,507) | 49.3   | 10.8    | 24.2  | 6.7   | 9.0   | 小計               | 100.0(3,685) | 44.5   | 10.4    | 27.3  | 6.8   | 10.8  |
| 平均値              | (%)          | 70.36  | 8.21    | 12.93 | 4.72  | 3.78  | 平均値              | (%)          | 62.50  | 9.23    | 18.88 | 5.00  | 5.59  |
| 標準偏差             | (%)          | 11.21  | 3.57    | 8.41  | 1.89  | 2.76  | 標準偏差             | (%)          | 12.05  | 5.78    | 10.42 | 2.07  | 3.56  |
| 変化係数             | (%)          | 15.93  | 43.44   | 65.05 | 39.98 | 73.03 | 変化係数             | (%)          | 19.29  | 62.61   | 55.16 | 41.40 | 63.58 |

備考) ( ) 内数値は実数である。

不詳は除く。

昭和60年調査は沖縄県を含む。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米+米+米 131 = 米+めん+米 141 = 米+パン+米 411 = パン+米+米 011 = 欠+米+米

上記のパターン以外はその他とした。

ここでは全国を16の地域に区分し、さらにこれを3大都市圏とそれ以外に区分して示した。主要な特徴と変化についてみると次の如くである。

3食米飯パターンは一般に大都市圏において少なく、農村地域において多い。昭和51年調査において3食米飯パターンをとるものの割合は、全国水準の62.3%に比較して、南九州と山陰はいずれも80%水準を越えており、さらに79.6%の北陸、79.5%の南東北が続いて高い。しかし、3大都市圏全体では50%を割って49.3%と低い。しかし、3大都市圏の中では東京圏が41.2%と最も低く、農村を多く含んでいる中京圏は69.0%と最も高く、阪神圏は53.1%と中間水準にある。昭和60年調査では3食米飯パターンをとるものの割合が80%以上を示しているのは山陰のみ(83.0%)である。しかし、南九州(73.9%)、北陸(73.9%)、東山(71.3%)、北東北(70.9%)はなお70%の高水準にある。他方において、3大都市圏全体では44.5%と低下し、特に東京圏では38.0%と最も低い

水準を示している。

次に朝パン食パターンについて考察してみよう。昭和51年においてもっとも高い割合を示したのは阪神圏の31.2%であって、次いで東京圏が23.9%を示し、阪神圏の朝パン食パターンの強い傾向を示している。地方でも山陽（21.1%）、四国（20.9%）、京阪周辺（19.2%）と20%前後の高水準を示し、中京圏の15.6%よりはるかに高い。一般に東日本ではこのパターンは少なく、特に北東北では4.3%と最低率を示している。昭和60年になると地域によって著しい変化が起きている。たとえば山陽では昭和51年の21.1%から60年には23.8%に増加、四国では20.9%から17.5%へと減少を示している。阪神圏では31.2%から37.9%へと増加、中京圏も15.6%から23.4%へと著しい増加を示しているが、東京圏では23.9%から23.5%へ減少している。

しかし、昭和51年において著しく低かった農村地域、たとえば東山では4.5%から10.1%へと2倍以上に、その他北海道では6.9%から12.1%と著しい増加を示している。

総数としては16.7%から21.6%へとかなりの増加を示しているが、地域別にみると従来から著しく低水準であった地域の著しい増大によって全国の朝パン食パターンの水準の上昇をもたらしたと考えられる。

地域別主食パターンの地域差を変化係数でみると、3食米飯パターンは他のパターンに比較して地域間の差が小さいことを示唆している。また51年と60年を比較すると朝パン食パターンとその他のパターン以外はすべて地域間の差の拡大がみられる。

## 5. 教育程度からみた主食パターン分布構造

教育程度を初等教育卒、中等教育卒、高等教育卒の3区分によってその主食パターンの分布構造の差異とその変化についてみると表4の如くである。3食米飯パターンをとるものの割合は教育程度の低い初等教育卒のものでもっとも高く、教育程度が高くなるにしたがってこの割合は目立って減少するという逆相関の関係が明らかにみられる。すなわち3食米飯パターンを昭和51年についてみると初等教育卒では75.2%、中等教育卒53.0%、高等教育卒35.7%となっている。この教育程度によるこの

表4 教育程度別にみた主食パターン分布

(単位：%)

| 教育程度         | 総 計              |                  | 主 食 パ タ ー ン |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|--------------|------------------|------------------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|              |                  |                  | 111         |       | 131   |       | 141   |       | 411   |       | 011   |       | その他   |       |
|              | 昭51              | 昭60              | 昭51         | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   |
| 初等教育<br>卒業 者 | 100.0<br>(4,172) | 100.0<br>(2,682) | 75.2        | 71.0  | 4.6   | 5.4   | 3.1   | 2.8   | 10.4  | 12.8  | 3.3   | 3.0   | 3.2   | 5.0   |
| 中等教育<br>卒業 者 | 100.0<br>(2,277) | 100.0<br>(3,085) | 53.0        | 50.7  | 6.5   | 6.4   | 4.0   | 3.2   | 20.6  | 24.5  | 8.8   | 7.4   | 6.6   | 7.7   |
| 高等教育<br>卒業 者 | 100.0<br>(1,242) | 100.0<br>(1,779) | 35.7        | 37.3  | 6.5   | 8.8   | 6.5   | 4.9   | 30.6  | 30.2  | 8.0   | 7.5   | 12.5  | 11.0  |
| 平均値          | (%)              | (%)              | 54.63       | 53.00 | 5.87  | 6.87  | 4.53  | 3.63  | 20.53 | 22.50 | 6.70  | 5.97  | 7.43  | 7.90  |
| 標準偏差         | (%)              | (%)              | 19.80       | 16.97 | 1.10  | 1.75  | 1.76  | 1.11  | 10.10 | 8.87  | 2.97  | 2.57  | 4.71  | 3.00  |
| 変化係数         | (%)              | (%)              | 36.24       | 32.01 | 18.70 | 25.45 | 38.86 | 30.69 | 49.19 | 39.43 | 44.35 | 43.07 | 63.31 | 38.04 |

備考) ( ) 内数値は実数である。

不詳は除く。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米+米+米 131 = 米+めん+米 141 = 米+パン+米 411 = パン+米+米 011 = 欠+米+米

上記のパターン以外はその他とした。

10年間の変化は小さい。ただ、初等教育卒、中等教育卒では若干の減少、高等教育卒では反対に若干の増加という異なった傾向がみられることが注目されよう。

朝パン食パターンについてみると3食米飯パターンの傾向とは対照的に昭和51年では初等教育卒でもっとも少なく10.4%、中等教育卒20.6%、高等教育卒30.6%と高い順相関の関係がみられる。昭和60年では初等教育卒と中等教育卒で若干の増加、高等教育卒ではほとんど変化がみられないが、傾向としては昭和51年と同様である。昼めんパターンでは初等教育卒で若干低い傾向がみられるが、中等、高等教育卒の間ではほとんど差はみられない。昼パンパターンでは教育程度の高さにほぼ比例して高くなる傾向がみられる。また昭和51年に比較して60年ではどの教育程度でも低下している。また朝欠食パターンもこの10年間に若干低下の傾向がみられる。昭和60年では初等教育卒がもっとも低い割合(3%)を示しているが、中等、高等教育卒では7%ないし8%のほぼ同水準の割合を示しており、51年と同じ傾向である。

なお、注目すべき点は「その他」パターンである。このパターンは昭和51年、60年ともに同様な傾向を示している。初等教育卒でもっとも少なく、高等教育卒でもっとも多く10%を越えており、中等教育卒では中間水準にある。主食パターンの多様化が高等教育卒においてもっとも著しいことは、この「その他」パターンにもあらわれている。

## 6. 職業別にみた主食パターン分布構造

一般に、3食米飯パターンが減少していることは述べてきたが、職業別にみるとむしろこの10年間に若干増加した職業もみられる。

販売・サービス関係の職業についてみると、3食米飯パターンはもっとも低く昭和51年においてすでに50%を割り、60年には44%と低下している。次いで事務・技術・専門・管理関係でこのパターンが低い。昭和51年に52.5%であったが、60年には50%の水準を割って49.4%となっている。

表5 職業別にみた主食パターン分布

(単位：%)

| 職 業               | 総 計              |                  | 主 食 パ タ ー ン |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------------------|------------------|------------------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|                   |                  |                  | 111         |       | 131   |       | 141   |       | 411   |       | 011   |       | その他   |       |
|                   | 昭51              | 昭60              | 昭51         | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   |
| 農林漁業関係            | 100.0<br>( 893)  | 100.0<br>( 692)  | 91.3        | 92.2  | 2.8   | 1.9   | 1.1   | 0.9   | 2.9   | 2.7   | 0.6   | -     | 1.1   | 2.3   |
| 生産・運輸<br>関        | 100.0<br>(1,464) | 100.0<br>(1,078) | 73.0        | 62.7  | 5.0   | 5.2   | 2.3   | 2.3   | 13.2  | 20.6  | 3.3   | 3.9   | 2.7   | 5.2   |
| 販売サービス<br>関       | 100.0<br>(1,696) | 100.0<br>(1,459) | 49.9        | 44.1  | 7.0   | 6.4   | 4.5   | 3.6   | 21.2  | 27.8  | 9.2   | 9.7   | 7.8   | 8.1   |
| 事務・技術・専<br>門・管理関係 | 100.0<br>(2,497) | 100.0<br>(2,600) | 52.5        | 49.4  | 6.1   | 7.8   | 5.3   | 3.5   | 22.5  | 25.5  | 6.0   | 5.3   | 7.4   | 8.4   |
| 平均値               | (%)              | (%)              | 66.68       | 62.10 | 5.23  | 5.33  | 3.30  | 2.58  | 14.95 | 19.15 | 4.78  | 6.30  | 4.75  | 6.00  |
| 標準偏差              | (%)              | (%)              | 19.40       | 21.54 | 1.81  | 2.52  | 1.94  | 1.26  | 9.02  | 11.37 | 3.68  | 3.03  | 3.36  | 2.86  |
| 変化係数              | (%)              | (%)              | 29.09       | 34.68 | 34.67 | 47.29 | 58.76 | 49.06 | 60.37 | 59.37 | 77.13 | 48.04 | 70.71 | 47.63 |

備考) ( ) 内数値は実数である。

不詳は除く。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米+米+米 131 = 米+めん+米 141 = 米+パン+米 411 = パン+米+米 011 = 欠+米+米

上記のパターン以外はその他とした。

生産・運輸関係では3食米飯パターンの割合はかなり高く、昭和51年で73.0%であった。しかし、60年には62.7%へと著しい低下率を示している。3食米飯パターンがいぜんとしてもっとも高いのは農林漁業関係の職業つまり第1次産業従事者である。昭和51年には91.3%であり、60年には若干ではあるが増大して92.2%となっていることが注目されよう。

朝パン食パターンをとるものの割合は、昭和51年、60年においても同様な傾向がみられる。3食米飯パターンのそれとは反対で、米飯パターンの多い職業では朝パン食パターンは少なく、3食米飯パターンの少ない職業では多くとっている。たとえば昭和60年調査の農林漁業関係では朝パン食パターンはわずかに3%弱であるのに対して、販売サービス関係では27.8%と著しく高い。また朝欠食パターンは農林漁業ではほとんどみられないが、特に販売サービス業関係でもっとも高く10%に近い水準を示している。

農林漁業関係の職業では3食米飯パターンに著しく集中しているためこれ以外のパターンの割合はきわめて少ないのに対して、著しい対照を示しているのは販売サービス関係の職業であって、主食パターンは多くのパターンに多様化している。この職業と農林漁業関係の職業と比較してみると、60年調査では3食米飯パターンは前者は後者の半分以下(44%)、朝パン食パターンは農林漁業関係の約10倍、昼めんパターンは約3.4倍、昼パンパターンでは4倍、「その他」パターンでは3.5倍といった大きな開きがみられる。また変化係数をみると3食米飯パターンと昼めんパターンを除いてすべて職業間の差が縮少の傾向を示している。

#### 7. 世帯規模からみた主食パターン分布構造

世帯員の大きさ別に主食パターンの分布状態とこの10年間における変化をみると表6の如くである。

まず、3食米飯パターンについてみると、世帯規模が大きくなるほどこのパターンの割合が増大する傾向がみられる。たとえば、昭和51年についてみると1人世帯では44.4%でもっとも低く、7人以

表6 世帯規模別にみた主食パターン分布

(単位：%)

| 世帯規模 | 総 計          |              | 主 食 パ タ ー ン |       |       |       |       |       |       |       |       |        |       |       |
|------|--------------|--------------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
|      |              |              | 111         |       | 131   |       | 141   |       | 411   |       | 011   |        | その他   |       |
|      | 昭51          | 昭60          | 昭51         | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60   | 昭51   | 昭60    | 昭51   | 昭60   |
| 1 人  | 100.0(1,193) | 100.0(1,136) | 44.4        | 32.8  | 4.4   | 4.7   | 4.4   | 4.0   | 17.9  | 27.4  | 16.5  | 16.5   | 12.1  | 14.4  |
| 2 人  | 100.0(1,251) | 100.0(1,446) | 61.6        | 52.1  | 4.9   | 7.5   | 4.9   | 4.5   | 18.1  | 21.9  | 4.0   | 4.5    | 6.5   | 9.4   |
| 3 人  | 100.0(1,483) | 100.0(1,372) | 61.4        | 59.8  | 4.9   | 6.6   | 4.0   | 3.9   | 19.6  | 19.7  | 5.1   | 4.0    | 4.5   | 5.8   |
| 4 人  | 100.0(1,945) | 100.0(2,052) | 62.5        | 54.4  | 6.8   | 7.6   | 3.5   | 2.9   | 18.8  | 23.7  | 3.5   | 4.8    | 4.5   | 6.5   |
| 5 人  | 100.0( 982)  | 100.0(1,012) | 70.5        | 62.9  | 5.6   | 6.5   | 4.1   | 2.4   | 12.8  | 20.0  | 2.3   | 3.3    | 3.9   | 4.7   |
| 6 人  | 100.0( 515)  | 100.0( 457)  | 79.4        | 71.6  | 6.4   | 6.3   | 1.9   | 3.1   | 8.3   | 12.7  | 1.9   | 1.8    | 2.0   | 4.6   |
| 7人以上 | 100.0( 310)  | 100.0( 229)  | 81.9        | 83.8  | 4.8   | 2.2   | 1.9   | 1.7   | 5.2   | 8.7   | 3.2   | 0.4    | 2.5   | 3.0   |
|      | 平均値 (%)      |              | 65.96       | 59.63 | 5.40  | 5.91  | 3.53  | 3.21  | 14.39 | 19.16 | 5.21  | 5.04   | 5.14  | 6.91  |
|      | 標準偏差 (%)     |              | 12.73       | 16.03 | 0.90  | 1.90  | 1.19  | 0.98  | 5.73  | 6.43  | 5.09  | 5.29   | 3.40  | 3.86  |
|      | 変化係数 (%)     |              | 19.30       | 26.89 | 16.67 | 32.07 | 33.72 | 30.61 | 39.81 | 33.57 | 97.58 | 104.87 | 66.17 | 55.77 |

備考) ( )内数値は実数である。

不詳は除く。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米 + 米 + 米    131 = 米 + めん + 米    141 = 米 + パン + 米    411 = パン + 米 + 米    011 = 欠 + 米 + 米

上記のパターン以外はその他とした。

上では81.9%と著しく高くなっている。昭和60年についてみるとどの世帯規模でも3食米飯パターンは減少しているが、世帯規模別にみると昭和60年も51年と同様に1人世帯で32.8%と最も低く、7人以上で83.8%と高いのである。昭和60年で若干注目すべきことは、昭和51年では4人世帯の3食米飯パターンが3人世帯よりも高かったのが、60年には逆転して低くなっていることと、7人以上の世帯では60年の3食米飯パターンが昭和51年よりも増大していることである。

次に朝パン食パターンについてみると昭和51年では3人世帯でもっとも多く19.6%となっており、これをピークとして世帯規模が小さいばあいも大きいばあいも低下するといった富士山型の傾向を示している。しかし、昭和60年になるとこの傾向は崩れる。1人世帯で27.4%と最も高い割合を示し、そのあと2人世帯、3人世帯で21.9%、19.7%と低下したあと4人世帯で23.7%という2回目のピークを形成し、そのあと世帯規模の拡大にともなって急減している。

次に朝欠食パターンについてみると1人世帯で圧倒的に高く昭和51年、60年ともに16.5%という割合を示している。2人世帯、3人世帯、4人世帯ではほぼ4～5%の水準であり、5人以上の世帯では2%前後で低い。

どの世帯規模にもほぼ共通にみられる傾向は、昼めんパターンが増加、昼パンパターンの減少傾向である。

最後に留意すべき点は、「その他」パターンである。どの世帯規模においても増加の傾向を示しているが、特に、1人世帯において12.1%（昭和51年）、14.4%（昭和60年）と際立った高水準を示していることである。昭和60年において2人世帯が9.4%という高い水準を示しているが、その他の世帯規模では5～6%の低水準である。

以上世帯規模からみればあいの著しい特徴の第1点は、世帯規模が大きくなると3食米飯パターンの割合が高くなることであり、第2点は1人世帯にみられた際立った多様性ということである。世帯規模間の差をみると昼パンパターンと朝パンパターン、「その他」パターンにおいては51年に比較して若干縮小傾向にある。しかし、これ以外のパターンでは世帯規模間の差の拡大がみられる。

## 8. 移動経験別にみた主食パターン分布構造

移動経験のある者（移動者）とない者（定着者）に区分して、主食パターンの分布構造とその変化についてみると表7の如くである。

3食米飯パターンをとるものの割合が移動者より定着者で高いことは過去の調査結果<sup>3)~7)</sup>でも既に明らかにされているが、本調査結果からも同様な傾向がみられ注目される。昭和51年から60年にかけての変化をみると定着者も移動者もともに3食米飯パターンは顕著な減少がみられる。定着者では72.2%から61.5%へ、移動者では52.0%から45.6%へと低下している。減少率では定着者が14.8%であるのに対して、移動者では12.3%と低くなっている。それは移動者がすでに昭和51年で52%と低水準に達していたからである。しかし、昭和60年には逐に50%の水準を割っており、定着者よりも26%も低い。これを男女別にみると定着者でも女では昭和60年に逐に50%の水準に低下しており、移動者

3) 厚生省人口問題研究所、『昭和38年度実地調査、労働力人口移動実態調査』、実地調査報告資料、1965年2月、p.170.

4) 厚生省人口問題研究所、『昭和43年度実地調査、人口の移動性と社会経済的要因との関係に関する調査』、実地調査報告資料第1部、1969年3月、p.345. および第2部、1970年2月、p.298.

5) 厚生省人口問題研究所、『昭和45年度実地調査、人口分布変動と地域経済との関係に関する調査』、実地調査報告資料、1972年3月、p.203.

6) 厚生省人口問題研究所、『昭和46年度実地調査、人口分布変動と地域経済との関係に関する調査』、実地調査報告資料、8分冊、1972年7月～1972年12月、p.672.

7) 厚生省人口問題研究所、『昭和56年度実地調査、人口移動と定住に関する調査』、実地調査報告資料、1982年2月、p.141.



表7 移動経験別にみた主食パターン分布

(単位：%)

| 移動経験  | 総 計          |              | 主 食 パ タ ー ン |      |     |     |     |     |      |      |     |     |      |      |
|-------|--------------|--------------|-------------|------|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|------|------|
|       |              |              | 111         |      | 131 |     | 141 |     | 411  |      | 011 |     | その他  |      |
|       | 昭51          | 昭60          | 昭51         | 昭60  | 昭51 | 昭60 | 昭51 | 昭60 | 昭51  | 昭60  | 昭51 | 昭60 | 昭51  | 昭60  |
| 定 着 者 |              |              |             |      |     |     |     |     |      |      |     |     |      |      |
| 計     | 100.0(3,907) | 100.0(4,226) | 72.2        | 61.5 | 4.6 | 6.5 | 3.6 | 3.5 | 11.7 | 17.4 | 3.7 | 4.5 | 3.8  | 6.4  |
| 男     | 100.0(3,345) | 100.0(3,671) | 73.9        | 63.1 | 4.7 | 6.7 | 3.0 | 3.0 | 11.4 | 16.8 | 3.5 | 4.1 | 3.1  | 6.0  |
| 女     | 100.0( 562)  | 100.0( 555)  | 62.5        | 50.6 | 4.3 | 5.2 | 7.1 | 7.0 | 13.5 | 21.1 | 5.2 | 6.8 | 7.3  | 9.2  |
| 移 動 者 |              |              |             |      |     |     |     |     |      |      |     |     |      |      |
| 計     | 100.0(3,784) | 100.0(3,243) | 52.0        | 45.6 | 6.4 | 7.0 | 4.2 | 3.4 | 21.8 | 27.1 | 7.6 | 7.7 | 7.7  | 9.2  |
| 男     | 100.0(3,199) | 100.0(2,814) | 54.0        | 47.5 | 6.6 | 7.3 | 3.7 | 3.2 | 21.6 | 25.4 | 7.5 | 7.6 | 6.2  | 8.9  |
| 女     | 100.0( 585)  | 100.0( 429)  | 40.9        | 33.1 | 5.3 | 4.7 | 6.8 | 4.4 | 23.1 | 38.5 | 8.2 | 8.6 | 15.8 | 10.7 |

備考) ( ) 内数値は実数である。

不詳は除く。

主食パターンの記号は次の通りである。

111 = 米+米+米 131 = 米+めん+米 141 = 米+パン+米 411 = パン+米+米 011 = 欠+米+米

上記のパターン以外はその他とした。

では33%という異例的な低水準に達している。この60年の移動者の女で特記すべき点は、この3食米飯パターンの割合は朝パン食パターンの38%よりも低くなり、主食パターンのトップは3食米飯パターンではなく、朝パン食パターンであるということである。

次に朝パン食パターンについてみよう。定着者でもこの10年間に11%から17%へと増加し、特に女では13%から21%へと増大している。移動者では22%から27%、特に女では23.1%から38.5%へと67%という伸び率を示していることが注目される。

朝欠食パターンでは一般に女の方が多く、移動者において若干高くなっていること、特に移動者の女において8~9%の水準に達していることを指摘しておこう。定着者、移動者のいずれにおいても、主食パターンの選択において女の方がより強い多様化志向の傾向を示しているといえよう。

### まとめ：多様化の新しい展開と格差

昭和50年代の10年間に、日本人の食生活は新しい展開をみせた。それはひとことで言えば主食パターンの分布構造の多様化、複雑化の一層の進展と格差拡大ということである。

第1は、3食米飯パターンがこの10年間に予想以上に減少したことであり、それに対応して朝パン食パターンが増大したことである。このようなもっとも基本的な2つの主食パターンの全国水準からみた著しい変化を、男女、年齢、地域、教育、職業、世帯規模、移動経験の有無といった社会的、経済的、人口学的指標からみると格差が拡大している。

第2は、男女別の特徴である。主食パターンの選択行動は男よりも女において積極的である。3食米飯パターンの減少、朝パン食パターンの増加は女において一層顕著であり、国民の主食パターン分布構造に強い影響力を発揮している。

第3は、年齢別にみて注目されることは、年齢上昇にともなう3食米飯パターンの増大傾向が、50~54歳を境としてそれ以上の高年齢で減少という新しい傾向があらわれてきたことである。また、若い年齢層における朝欠食パターンの増大が注目される。

第4は、地域からみた主食パターン分布構造に著しい地域間の差がみられる。全国的な傾向に対応する傾向は一般にみとめられるが、格差は縮小していない。

第5は、教育程度と規則的な相関関係がみられ、主食パターンが教育程度によって強く影響されていること、しかし、高等教育卒においては3食米飯パターン率の増大と、朝パン食パターン率がこの10年間殆ど変化がなかったといった新しい傾向にも留意すべきであろう。

以上はこの10年間における主食パターン分布構造の変化の一部を示したものであるが、このような変化は、第1次、第2次石油ショック以降における経済の構造的停滞の影響を反映しているように思われる。この経済的後退の中でのそれぞれの異なった属性をもった人口の反応を示していると考えられる。しかし、その反応がどうして異なっているかの理由は明らかにすることができない。この10年間にみられた新しい変化は、予想以上にきびしいものであるだけに、今後どのような変化の方向を示すかについての不断の追跡が必要である。